

勝

林

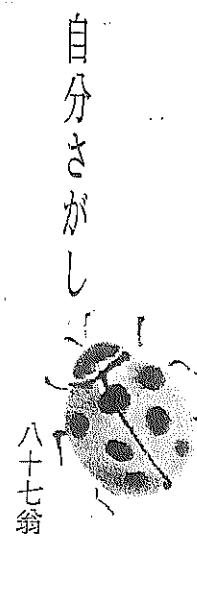
寺

寺

報

ところが最近、親鸞はお方に出会った。

一〇年ほど前、おやじの三十三回忌の法事を勤めた縁で、わが家の旦那のご住職から折々お教えいただくなつた。(わたしの家はもともと真宗門徒なのに、どうして早く聞かなかつたのだろう)



自分さがし

八十七翁

人の一生は「自分さがしの旅」だと最近あらためて感じております。

わたしがそう思つたのは、シベリヤから引き揚げて来て、あの混乱の時機に、わけもわからずある会社に入ったころ、職場研修で三日間、その町の禅寺で座禅修行をさせられた時のことでした。

あの時代、だれもが混乱していて、何のために働くのか、何を目的に生きて行くのか。暗中模索でありましたから、会社もそこを一人一人に究明してもらおうと、そんな研修会をしてくれたのでしょう。

わたしの記憶にあることばがあります。道元さまの言葉とか。

「仏道ヲ習ウトイウハ自己ヲ習ウナリ。自己ヲ習ウトイウハ自己ヲ忘ルナリ」

自分は何者なのか。自分探し。それがために座禅をする。座禅は自分へのこだわりを払つて、こだわりも執着もない本当の自分に出会い方。

教えていただいたそのコトバの意味は合点できましたが、その当時、混迷執着の霧を払つて真の自己を悟るなどということはできなかつた。

以後、今日、八〇歳を過ぎるまで、この生涯の課題、未解決。解決の糸口もつかめないまま迷つている。自分捜しができないまま終わってしまうのだろうか。それは、一生生きて来た意義の見出せないまま、空しく死んで行くことになる。



親鸞の「自分さがし」の道は、道元さまとは違つていた。道元は、世間の人間関係を断つて(出家の道)、自分の執着・煩惱も排除することによって真実真個の自分に出会おうとした。

親鸞は、比叡山伝統の教えに従つて「出家得度」に入つたが、脱俗聖者の道を捨てて、末むしろ俗世間・庶民の人間関係のなかで、末法獨世を生きて行くなかで真実の自分にめざめていった。

道元は、ひたすら座禅をするなかで「万法に証せられてある自己」と出会つた。

親鸞は、波乱混乱の時代、怨愛憎愛の人間関係のなかに身を置いて、その苦難のなかに如来に呼ばれている自己に目覚めていった。

わたしはここ十年來、敢えて、なるべく多くの人間関係を持つとうとしている。沈思默考では、いかにも老人スタイルのようだが、それでは私は、自分探しはできない。いろいろな人間関係を持ち、喜怒哀樂、すべて自分で教えていたたくこと縁といただいて老後を過ごしたいと思う。

ぼくが、「おおきにおおきにってなんちゅうこつちや」とたずねると。おかあちゃんが、「ありがとうございます」ということや」と教えてくれました。

そのときぼくは、「ほんとかナーニー」とちよつと疑問に思いました。

学校へ行く途中、そのことを思い出しながら歩いていると、隣の家の「たる」という犬がクンクンと僕の足もとに擦り寄つて来ました。そのとき、あのおばあちゃんの言葉がうかんできて、ぼくはおもわず「ありがとう」と言いました。犬はしつぽをふつて、「いってらっしゃい」といつてくれるように思いました。いつもは、怖るおそる通るのに、なんだか今朝は違つた犬に思えました。

「おばあちゃんのいったことつてほんとだ」



三月 弥生 のことば

二十一日	渋谷はる様一周忌法事	初
二十二日	平野初枝様忌明法事	
二十六日	みのりを聞く会	
二十八日	出石組組内会	
二十九日	「お花まつり」キッズサンガ	
三十日	彼岸序会	
十四日	浜薙様忌明法事	
十五日	長專寺前住職七回忌法事	
十八日	平野同役員会	午
二十四日	浜薙様忌明法事	



田園の畦道を歩いて行くと、名前のわからぬ小さな花が、いろいろ咲いていました。もう三月ですから当たり前です。気がつかなかつたけれど昨日も咲いていたに違いありません。ところがどうでしょう。ぼくが「ありがとう」と声を掛けると、花がいっぱいに咲せん。

がとう」と声を掛けると、花がいっぱいに咲せん。ところがどうでしょう。ぼくが「ありがとうございました。」「元気に学校に行っておいで」と。

おばあちゃんのいったことは本でした。

先生にも友達にも。いつもはあまり好きでない女の子にもためしてみたら、だれもが僕に「ありがとうございます」と言ってくれました。

家に帰つて、夜、このことをおかあさんに尋ねてみました。

「おばあちゃん、おおきにおおきにというあの呪文、だから教えてもらつたんやろ?」「そやねー、毎朝、参つてはるから、きっとお仮壇の如来さんからやろ」

座布団があれば

『育心』編集者
塚村

真美

あるところに勝手なおじいさんがいました。偉いポスト(地位)にいたこのおじいさんは定年後もますます悠々自適。ボランティアにサークルにと大忙しです。そして、どこでも持ち前の勝手ぶりを發揮していました。それだけじやなく、おじいさんは以前の仕事の関係先にも顔を出します。忙しい仕事場に突然やつてきて、迷惑千万です。

そんなこんなで、おじいさんはとうとう私のところにやつてきました。「お元気ですか?」「ゲゲゲ元気です」。いたしかたなく世間話をしていると、おじいさんは「もう行かなくちゃ」と立ち上がりました。中高年男性向け料理教室へ行く途中だったようです。「僕もへお一人さまになつたときの用意をしどかなくちゃ」。〈転ばぬ先の杖〉ですよ。じゃあ」といつて去つていきました。

「はて?」。残された私はなにかひっかかるのを感じました。「おひとのさま」って?。それはつまり、あのきれいですてきな奥様が先に逝かれることを想定しているのですね。「おまえ百まで、わしゃ九十九まで」じゃないんだ。と思つてしましました。

「自分だけは死はない」というこの感覚。でも、実は、だれにでもある感覚なのではないでしょうか。だんなさんの生命保険をかけて、受取人に自分の名前を書くときの、どちらどころのない罪悪感のような、笑つてごまかしたくなるような気持ちもそれに似ています。あるいは、さまざまな事故や事件や災害が。対岸の火事を眺めているような気持ちでいることも同じようなものではないでしょう。

「メント、モリ」は「死を想え」というラテン語の諺(エモギ)です。また、「休さんは、お正月の街をドクロを掲げて歩いたと言います。真宗では、「後生の一大事」といってこの世の命が終わつた後のことを心にかけておくようにと教えています。どれもこれも、「みんな、死ぬんやで、あんたも死ぬで」とおどしているようですが、どれもこれも生きるためにお示しくださっているのです。

「後生の一大事」は「転ばぬ先のツエ」というより「転んだ後の座布団」です。転んだ私を受け止めてくれる座布団のことを「あみださま」と呼びます。その座布団は分厚く大きい。だから、いつでもどこでも大丈夫なのです。ツエはあると安全ですが、座布団があると安心。安心してぶつかっていいける。思いつつ生きていけるのです。

そして、世のおかあさんたる人もまた、ツエよりも傘よりも、座布団になつてほしいと思ひます。



二月一日	浜 葦	儀
二月二十八日	上小田	さま
平野	董	一
九十四歳	暮坂	さま

出石組子とものつどい 花まつり

お勤め、白象行進、灌仏会(甘茶かけ)、ゲーム等楽しい催しが一杯です。是非ご参加ください。
お申し込みは、下の申込書をおてつぎのお寺にご提出ください。

花まつりとは。
佛教をひらかれた
お釈迦様のお誕生を
お祝いする行事です

日時 平成21年3月29日(日)
午前9時~11時30分(予定)

内容 お勤め お話し ゲーム
童話 白象飾付

会場 正福寺(出石町寺町)

白象町内行進(雨天変更)
灌仏会(甘茶かけ)その他

主催 浄土真宗本願寺派兵庫教区出石組

対象 保育園・幼稚園児等、小中学生

※幼稚園児以下の参加は、保護者または小学生以上の兄弟・姉妹同伴でのご参加をお願い致します。
※白象行進は町内を30分程度歩きます。必要ならばベビーカー等をご用意ください。

平成21年度
勝林寺仏事役員名簿
(2月1日総会選)

1 会長	坂本立	貢幸夫
2 副会長	田本山	芳隆
3 副会長	坂藤	光節
4 会計	斎口	博文
5 顧問	湯野	節
6 顧問	岡口	博文
7 事務局	湯山	隆
8 事務局	山田	富雄
9 事務局	中嶋	博文
10 事務局	永井	英樹
11 事務局		正人

任期は二年。大遠忌関連の行事が多いこの期間。

なにとぞよろしくお願ひします。

